

目次

はしがき

序論 司法参加と法主体性…………… 1

一 参加概念の非一義性 3

二 主体の決定関与 5

三 参加の機能性 10

四 法主体性と同一化 13

五 本書の構成 15

第一章 裁判への信頼と裁判利用行動…………… 21

一 法意識論とその限界 23

二 政治参加論のモデル 31

三 参加の前提となる心理体制 39

四 裁判への信頼の構造的特質 50

五 裁判利用行動の分析 64

第二章 裁判受容過程の構造分析 77

一 裁判への満足の機能的意義 79

二 裁判過程と心理過程 88

三 裁判官評価と人格表象 103

四 手続参加と意味づけ 114

五 裁判受容の司法政策的意義 130

第三章 刑事陪審と事実認定 137

一 問題提起 139

二 模擬陪審の試み 149

1 事件の内容および準備 149

2 アンケート調査の分析 153

三 第三者性の維持 164

1 応答性の確保 167

2 不偏性の維持 174

四 陪審の事実認定 184

1 理解の促進 184

2 推論の挺入れ 196

第四章 陪審裁判の政治学 207

一 シン普森裁判 209

二 たばこ訴訟と陪審 215

第五章 裁判における社会科学の利用 221

一 法の解釈と政策分析 223

二 社会科学の資料の収集 231

1 立法事実論の射程 231

2 アマイカス・キュリイと多元的参加 241

3 社会的権威の探求 248

三 異質な論理の葛藤 261

1 社会科学の誤用・濫用 261

2 科学的真理と党派性 269

3 科学の批判性と社会の良識 274

四 展望 289

目次

初出一覧 293

索引